



花鳥風月

NARUMI

ようやく手に入れた幸せや
築いた環境を壊してまでも
貴方が欲しい

それで命が終わろうとも
体の一部を引き換えにしても
貴方が欲しい

世界が、それを認めなくても
空で神が許さなくても
貴方が欲しい



アナタガホシイ、アナタガホシイ、アナタガホシイ・・・

幾日、幾月、何十年
その想いだけで生きてきたけど

知っている
本当は、何ひとつ
捨てられないこと

わかっている
二度と、もう二度と
戻れないこと

遠い記憶

人ごみの中

探しているのは「遠い記憶」

あがいてみたところで

戻れないと、わかっている

だから、いつもの場所で

いつものように

「遠い記憶」を待っている

わずかな時間、其処に止まることで

私らしく、生きながらえている

かまいたち

知らないうちに、ついた傷は

忘れることばかりを考えて

置き去りにしてきた痛みの代償

増える傷などお構いなしに

ヘラヘラ笑って「勲章」なんて。

だって、忘れたくて忘れたくて、忘れられなくて

今日も「かまいたち」が

新しい傷を付けてゆく

イタイ、と言うまで増殖してゆく

忘れようと逃げる私を傷付けて行く

怯えながら、疑いながら
それでもどうにか歩いてきた道

特別なものを持ってなくても
特別な気持ちを差し出すことで
うまくやれているような気がした

自分以外、信じてなかったけど
1人になる勇気なんてなかったから
誤魔化す様に生きていた

そして下る罪と罰

自分が一番、大切だった
誰の事も信じなかった
孤独が怖くて差し出した命
それは決して心じゃない

続いて行く罪と罰

愛していたのは嘘じゃない
愛されてなかっただけ
この身体全部を捧げても
心を差し出せなかっただけ

コンビナートが反射する海岸線には
消えない白煙が空を仰ぎ

暗闇の中

上へ上と立ち昇って行く

俯いた海に映し出される光からは
澱んだ灰色の水と潮の匂い

— いつまでも響く機械音 —

熱も冷めぬ夏の真夜中

「幸せになろう」と繰り返しながら

二人の未来を願い続けた、あの場所は

もう2度と

立ち入ることのできない

僕らだけの汚れた楽園

不調和音

月の行方は確かなのに
見えるものだけを信じる私が
月が消えたと思うように

大切なものは消えて行く

科学の申し子と呼ばれ
時代の悲劇に踊らされ
御伽噺を見下しながら

心知らず轍を進む

貴方の言った言葉の多くを
貴方と過ごした奇跡の時を
不確かなものと疑って
愛しているのに、と叫び続けた

月は、いつも見ていた
見えないものは確かにあった
貴方は、嘘を言わなかった

求めゆ魂の抑制

会えなくてもいい
声なんて聞けなくていい
触れられなくていい

愛しくて愛しくて狂いそうだから
この手に掴んだ瞬間
殺めてしまうかも知れない

生きていてくれたらそれでいい
私を憎んだままでいい

此処まで積み上げてきた
幾つもの時間や
かけがえのない環境
人も夢もプライドさえも
貴方には、到底敵わない

きっと何もかもを失ってしまう

会えなくていい
触れられなくていい
生きていてくれたらそれでいい

苦しいままでいい
私だけの想いでいい

私が、人として生き抜くためにー

since 2008.5

これまでの私の分岐点は
私自身で決断してきた

間違いや後悔は数えきれず
酷く跡が残ったけれど
確かに私が選んだ道だった

ただ一つを除いて。

「未来や幸せを願うなら」
なんて言葉と権力に勝てず
この身を投げ
命を捨てる覚悟で手放した

ただ一つを除いて。

これから先
どんな幸福を前にしても
太刀打ちできない過ち
それは大罪

Happy Birthday To You

RED

見上げた空の向こうには
楽園なんて夢はなく
拾い集めた宝石は
偽者だらけのただの石

見上げて、落ちて
拾って、捨てて

流れる赤い水の中
恋は、やがて愛の屍

張り巡らされた脳幹が
アイツ欲しさに善を捨てる

欺瞞な世界に赤い糸
偽善な日々に赤い水

強く強く業火に焼かれ
満ちる愛は地上の楽園

since 2010.4

居場所

見えない力の重圧に
耐えきれなかった弱き心

時を繋ぐ糸は途切れ
心壊れ
裸足で逃げ出したあの日から
吐くばかりの息が部屋を覆う

開けたクローゼットに眠る
あの日のジャケット
立ち向かえず手放した痛みを
毎日見ている

何もいない
愛することも愛されることも
もう何も

けどお願い、ただ一つ

二度と泣かない居場所を下さい

忘れたいと
嘆いて過ごした
昨日や今日が
忘れられない

日々になるなんて
あの頃は
想像も、しなかった



選択

幾度となく繰り返す夢は密やかに
貴方と彼を天秤にかけた、あの瞬間

貴方を選ばなかった、その選択は
今でも「間違い」だったのかと
問いかけられている

結果は見えていた
幸せになどなれない事
今の私が存在しない事
それが正しい答えだったんだと
今の私は知っている

だけど ねえ
選んだのは心ではなく幸せの選択
愛を選んだわけじゃない

ずる賢く大人だった
私の常識的な選択は
今も、そして、これからも
夜毎、悪夢にうなされて
罪意識に日々、殴られる

変わり続けるもの

出来損いの陳腐なドラマみたいに
僕の過去は、少しずつ変化して行く

あの日、君に言われた言葉も
あの時、起こった真実も
都合よく、塗り替えられている

だってそうだろう
君が僕の知らない顔をするなんて
君が僕を捨てるなんて -

とてつもなく大きな
「間違い」と言う箱の中

僕達の過去は、優しく微笑んでいる
もう一度、出逢える日がきたら
また、始められるんだって

居心地のいいドラマに仕上がっている

since 2008.1

密む三日月

凍える夜の静寂の中
明かりも温もりもない
この部屋の息は白く

閉じた目から
あふれだすのは あの日
二人、はしゃいだ夏

あと幾つ季節を繰り返し
幾夜 眠れない時を過ごせば
記憶は過去へと流れ行く？

明けて行く空
見上げた窓に
消え入りそうな遙か三日月
君は何も教えてくれない

最後の夏 最愛の人
墓地まで引きずって逝く想いを
今、空に託し

臆病な夜を越える

愛に囚われて

出来る限り武装して誰かを傷付けながら生きてきたんだ

守れるものは、この身体一つだけだったし
愛し方なんて知らなかった

くだらないテレビと 冷たいおかずをテーブルに
握り締めた、お金と冷たい夜が日常だった

そう、君に出逢うまで、ずっと独りだった

誰かを愛すること、守りたいものって
こんなにも人を無防備にする

傷つけないよう、嫌われないよう、離れないよう
誰かに依存することがこんなにも哀しいなんて

そう、君に出逢うまで、知らなかった

孤独と言う名の自由は今、幸福と言う名の鎖に変わる



それは、とても
長い夜で
救いの手など
どこにもなくて
有り余る
自由だけが

慟哭に
震える私を
包んでいる

独りでいい
誰も知らなくていい

誰にも知られたくない

since 2012.4

シナリオ

大丈夫だよ、と君は言った
平気だから、と泣き笑いした

それは、まるで三流映画
其処にいる間
吐いてしまいそうな、嫌悪感に
僕は黙って耐えていた

綺麗ごとで恋が終わらせられるなら
不条理な言葉にリボンをかけて
いくらでも君に捧げられる

強がるなよ、と抱きしめる事も

君が仕立てたドラマの中で
主人公にだってなれるだろう

ああ、君が思うより
僕は、つまらない大人で
君以上に
修羅の痛みを経験している

悲劇のヒロインに成り下がる君を
愛しむ術はどこにもない

嗚咽に息もできないくらい
真実が僕を苦しめるなら
どんな痛みも受け入れたのにー

僕の罪

空が映し出す
月は泣いている
夕闇は僕を傷付けている

繰り返す朝も 眩しい日差しも
君の面影に追い立てられ

凍える冬
夜の静寂が孤独を煽り
雨は僕の道を壊し
忘れるなよと、釘を刺す

許しがたい僕の罪を
宙が生きろと制裁する

since 2007.10

誓い

緩やかに明け行く空に向かい

たった一つ、

「泣かない」と心に誓った

酔えなくなったアルコールは捨てて

泣き通しだった夜を超え

何十年もの、遠い未来

君を抱きしめ泣こうと誓った

「愛してる」なんて言葉では足りない

「忘れない」なんて台詞は必要ない

明けては暮れる毎日に

死ぬことさえも出来ないのなら

もう二度と、僕は「泣かない」

since 2012.10

真実

心を、本当の気持ちを聞かせて、と
あなたは言うけれど
真実なんて聞こえた瞬間

空が割れるよ

言えないことがあって
見えないものがあって
形になんてならないからこそ
愛し合えるんだよ

傷付きたくなければ
真実なんて知らないほうがいい

since 2009.02

Season



春夏秋冬



あの夏

競うように鳴く蝉の

命の重さを知る9月の海

燃え尽きて放置された花火の残骸

空気の抜けたビーチボール

色を失くした水は苦く

潮騒につられて心が騒ぐ

あのヒグラシは、もういない

あの日の君は、もういない

さくら

散り損ね、蕾のまま
すがりつく残り桜に

激しく生き急いだ花びら達は
情け深き瞳で騒めく

強さが何の武器になる

プライドは容赦なく崩れ落ち
綺麗な瞬(とき)を過ぎた今も
あなたの残像にしがみつき
ただ、自分本位な愛を語る

そして一
華やかな瞬を知らず夏は忍ぶ

夏の匂い

暑さ逃す打ち水
濡れたアスファルトから
立ち上がる蜃気楼
夏の匂い

下駄箱のロッカーに
忍ばせた小さな約束
いつかの波音

積乱雲
やがて夏空

慈しむ間もなく、繰り返す夏

since 2010.6

神無月

まるで七夕の物語みたいに
一年に一度、秋の宵
祭囃子と共に通り過ぎる
凜々しき姿を探している

逢えないはずの人
逢うべきではない人
愛しさを、墓場まで隠し通すと決めた人
神様が、寄り添えないと言った人

だけど
神無月、貴方が不在の
一日限り、心、無秩序

この一瞬のためだけに
生きて行くならいでしょう

時間を飛び越え
初恋の少女のように
ひっそりと

愛しさの鼓動は太鼓に消える

愛しい人と去り行く秋は
孤独な冬を知らないけれど
祭囃子を子守唄に

一年先の神無月を待つ

行き過ぎてしまえば戻れなくなるけれど
立ち止まることは出来ないから
夜明け前に囀る鳥みたいに
恐る恐る歩いている

誰かが肩をたたいたら
進めなくなるから、どうか
よそ行き顔で、知らないフリして

渡された証書に書かれた文字や
おめでとうの歓喜の声は
まるで必要なかった時の経過

俯く姿勢で
進んで行くのが精一杯

どうか

貴方の姿をこのまま見ないで
戻れない場所まで、ゆっくりと

振り返る頃には、もう戻れない場所

花鳥風月

<http://p.booklog.jp/book/90161>

著者プロフ : NARUMI

<http://p.booklog.jp/users/style38/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/90161>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/90161>

目次に使用した写真

Imagebase: Free Stock Photography

<http://imagebase.net/Nature>

Photo Pin : Free Photos for Bloggers via Creative Commons

<http://photopin.com/>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ